

## 「政治の劣化」

2014年06月25日

政治が劣化していると言われている。逆に問えば、政治がまともな時があったらどうか。しかし近年は、無残としか言いようがない。

麻生太郎副総理兼財務相の諸々の発言は失言というより「暴言」である。かつての政治状況なら辞任させられたであろう。辞任に追い込めない野党の非力が失言、暴言を増長させている。

石原伸晃環境大臣は福島原発の除染物質の中間貯蔵所問題で、記者団に「最後は金目でしょう」と言った。テレビ報道で、彼の声を聞くと「でしょ」のところがはね上がっていた。「金で解決するんでしょ」と言ったと聞こえる。原発事故で故郷を失って苦しむ人々には耐え難い侮辱である。石原大臣は言い訳をしていたが、通じないことを知って、お詫び行脚をしている。参議院本会議で民主党の議員が、石原大臣のこの発言を追及した時、議場から「本当だ」というヤジがあった。自民党政治は金で解決していくというのが本音であろう。日本の政治は理念や哲学はなく、金で動かしてきた事情をもろに表している。負担と犠牲を負った人々の痛みに対し深い配慮が何より大切である。確かに、負担と犠牲を強いるのだから、お金で償わなければならない。しかし、そこでは、負担と犠牲を負った人々の理解、納得を得ることが先である。また、お金は国民の税金であるから国民的合意が必要である。税金を用い、意のままに政治を行おうとする傲慢は許されないことを知るべきである。

東京都議会で、塩村文夏議員が妊娠、出産、育児など女性たちに対するサポート問題を問い質していた時「早く結婚したほうがいいんじゃないか」というヤジが飛んだ。続いて「本当だよ」というヤジがあった。誰がヤジったかが問われたが、知らん振りだった。ヤジった鈴木章浩議員は3回も否認、激しく否定していた。事態の大きさに気がついてようやく自白した。この間の鈴木議員の言い訳と態度には辟易を通り越し、気分がめいってしまった。欧米メディアは「セクハラ（性的嫌がらせ）」ではなく、鈴木議員を「性差別者」として報道している。

柳沢伯夫元厚生大臣は「産む機械、装置の数は決まっているから、あとは一人頭で頑張ってもらうしかない」と女性を産む機械、装置と見る暴言をした。女性蔑視の風潮は、自民党の中に深く根付いている。

話は変わるが、ワールドカップは日本の完敗であった。実力の差が違うということであろう。ワールドカップは膨大なお金と人が動く世界最大のスポーツイベントになっている。新聞、テレビ報道は加熱し、若者たちは熱狂している。ローマ帝国の為政者たちは「パンとサーカス」を与えておけばいいと豪語していた。食べ物を与え、気晴らしのサーカス（剣闘士の試合）を見せておけば、政治は安泰だと言った訳である。現在の若者の多くは生活を支配する政治には関心を持たず、どうでもいいスポーツに燃え上がっている。これらを見て、日本の政治家たちはやり易いだろうなと思う。

政治の劣化は国民がもたらす。劣化した議員を生み出さないように、また、戦争に駆り出される状況を阻止するように、目覚めた国民になる時ではないか。